

第68回“社会を明るくする運動”く犯罪や非行を防止し、立ち直りを支える地域のチカラく作文コンテスト 優秀賞 “社会を明るくする運動”東京都推進委員会委員長賞

「明るい社会を目指す小さな一歩」

清瀬市立清瀬第十小学校

六年 田谷 優佳

私は最近、学校の総合学習でハンセン病について学んでいます。ハンセン病は「らい菌」に感染することで起こる病気です。ハンセン病は薬で治せますし、他人にうつることはほとんどない病気ですが、昔の日本ではハンセン病が子供に遺伝するとか、他人に伝染するおそろしい病気だとかいうまちがった知識や考えが広まっていきました。そのためハンセン病の患者さんは全国各地にある療養所に強制かくりされていました。今では法律などが見直されて強制かくりは無くなっています。

しかし、私も実際に訪問しましたが、まだたくさんの方が療養所で暮らしています。私はどうして療養所を出て暮らさないのかと不思議に感じましたが、自分や家族が偏見によっていやな思いをするかもしれない、ということが理由のひとつにあるそうです。

私はハンセン病の問題を通して、自分の暮らしている社会の中に偏見や差別によって苦しんでいる人がたくさんいることに気付かされました。法律などが見直されても、偏見や差別のせいで社会復帰が出来ないというのはとても悲しいことだと思います。

犯罪や非行をした人の立ち直りを考えた時、私はこうした差別や偏見が大きなかべになるのではないかと思います。例えば、犯罪を犯した人が仕事を見つけてやり直そうと

しても就職を断られたり、就職出来たとしても職場で変な目で見られるということがあると思います。

私自身何か失敗をして、あらためてチャレンジしようとしているときに、周りから「どうせまた…」と言われた経験があります。そんな時は自分でも「どうせ私はできないから。」と投げやりな気持ちになって物事が悪い方、悪い方に進んでいってしまいます。

犯罪や非行から立ち直ろうとしている人も同じで、周りから偏見を持たれることが原因で犯罪や非行をくり返してしまう人が多くいるのではないかと思います。だからやり直そう、立ち直ろうとしている人には差別や偏見の目を向けずに、温かい目で見守ることが必要だと思います。

私は明るい社会とは、お互いに「少しくらい失敗しても大丈夫！」と声をかけあえるような社会だと考えます。法律や制度をいくら変えても、私たち一人一人の心から差別や偏見が無くならない限り、決して明るい社会は実現しないと思います。今の私には立ち直ろうとしている人を直接助けることは出来ませんし、社会全体を変えることも出来ません。しかし自分の心は意識すれば変えることができます。小さな一歩かもしれません。私が、私はまず自分の中の偏見や差別の心を無くそうと思います。

そして一人一人の小さな一歩も積み重なれば大きな歩みになって社会を変えられるかもしれません。なので私は将来周りの人たちの心を変える行動ができるように、少しずつでも努力していきたいです。